

「貞伝作鑄造阿弥陀如来立像」について

寸法 全長 5.5 cm (含台座部、仏像のみでは約 3.6 cm)
材質 鑄銅製
形式 阿弥陀如来立像
記銘等 背面に「貞傳作」の刻書あり
所有者 中泊町小泊字小泊 68 西山 徹
由来等 中泊町小泊字小泊 318 小林善則家よりもたらされたもの



貞伝作鑄造阿弥陀如来立像

貞伝上人

本資料は、青森県東津軽郡今別町に所在する浄土宗本覚寺第五世住職貞伝上人（1690～1731）が晩年に製作した鑄銅仏であり、一般的には「貞伝仏」「万体仏」等の名称で知られる。

享保元年（1716）本覚寺住職に就任した貞伝は、多聞天堂の建立、本堂の再建、撞鐘鑄造など同寺の振興に努める傍ら、蝦夷地布教、彫刻・仏像等の制作、漁法指導など多方面にわたって活躍し、現在でも外ヶ浜地域では崇敬の対象となっている（注1）。なお貞伝同様に、彫刻・仏像等の制作、漁業の育成等に尽力し、名声を得ている第十三世住職愍栄上人は小泊出身である。

貞伝の彫刻

貞伝は、万体仏以外にも多数の仏像・彫刻を手がけたとされる。本覚寺には、青銅塔婆（青森県重宝）・本堂欄間・多聞天像・石佛（今別町指定文化財）ほかの貞伝作資料が残されている。

中泊町上高根地区にある西光庵（中里地区上高根；深郷田浄土宗善

太宰治『津軽』の中の貞伝和尚

蟹田に住む友人Nを訪ねた際に、貞伝が話題にのぼる：

今別には本覚寺といふ有名なお寺がある。貞伝和尚といふ偉い坊主が、ここの住職だつたので知られてゐるのである。貞伝和尚の事は、竹内運平氏著の青森県通史にも記載せられてある。すなはち、「貞伝和尚は、今別の新山甚左衛門の子で、早く弘前誓願寺に弟子入して、のち磐城平、専称寺に修業する事十五年、二十九歳の時より津軽今別、本覚寺の住職となつて、享保十六年四十二歳に到る間、其教化する処、津軽地方のみならず近隣の国々にも及び、享保十二年、金銅塔婆建立の供養の時の如きは、領内は勿論、南部、秋田、松前地方の善男善女の雲集参詣を見た。」といふやうな事が記されてある。そのお寺を、これから一つ見に行かうぢやないか、と外ヶ浜の案内者N町会議員は言ひ出した。

「文学談もいいが、どうも、君の文学談は一般向きでないね。ヘンテコなところがある。だから、いつまで経つても有名にならん。貞伝和尚なんかはね、」とN君は、かなり酔つてみた。「貞伝和尚なんかはね、仏の教へを説くのは後まはしにして、まづ民衆の生活の福利増進を図つてやつた。さうでもなくちや、民衆なんか、仏の教へも何も聞きやしないんだ。貞伝和尚は、或いは産業を興し、或いは、」と言ひかけて、ひとりで嘖き出し、「まあ、とにかく行つて見よう。今別へ来て本覚寺を見なくちや恥です。貞伝和尚は、外ヶ浜の誇りなんだ。さう言ひながら、実は、僕もまだ見てゐないんだ。いい機会だから、けふは見に行きたい。みんなで一緒に行かうぢやないか。」；

この後、一行は外ヶ浜沿いに北上し、今別本覚寺に寄り、貞伝に関する珍問答を繰り広げることになる。

導寺末庵、天明3年(1783)善導寺住職廊道が開基建立したとされる)の本尊石造阿弥陀如来坐像も、貞伝の作と伝えられている。

また貞伝作とされている仏像は、北海道にも存在する。伊達市に所在する浄土宗有珠善光寺の本尊鑄造阿弥陀如来像、松前藩菩提寺曹洞宗宗圓寺(小樽市*元来は松前にあったとされる)の本尊木造丈六釈迦如来坐像ならびに五百羅漢像(北海道指定有形文化財)は、貞伝の造仏とされている(注2)。

万体仏制作の経緯

貞伝上人の事績を記した「貞伝上人東域念仏利益伝(『今別町史』所載)」においては、万体仏制作の経緯について次のように伝える。

享保十一年丙午正月、貞伝上人金銅塔姿造立の志願あり。其旨趣を尋るに、師摂化の機縁純熟し、招かざるに日課、念仏授与の弟子、道俗男女数万人に及べり。師恩念すらく、このあまたの弟子の中には、定て中悔、退転の輩も多かるべし、われこれをいかんともすべきやうなし。仍て金銅塔一基を起立し、結会諸人の名帳と納め、これを本覚寺精舎に安鎮し、将来永く寺塔の在んかきり、念仏法音の功力、諸人胆礼の縁勲を以て、たとひ中悔、怠慢の族も一念発起の信行、遂に空しからずして、悉く浄土に起生し、蓮花勝会の主伴とならんとなり。この盛挙を聞て、諸方より古塚の金銅器物の類集りて、其量七百貫目に及べり。ここに於て出羽国の鑄工北原氏に命じて、高さ一丈の大塔婆、翌年五月中旬に成就せり。その塔の図象は巻の始に載するがごとし。同六月廿三日より七月二日まで、慶讃供養のため、千部の阿弥陀経、流灌頂念仏会の法用を修して、咒願回向を遂げらる。自国他方より結縁群衆の盛なる事、外浜に於て前代未聞のよし、今に至て人皆談説す。来詣の諸人の中に、或は天花の降るを見、或は半空に数千の竜燈の現ぜしを見、或は紫雲のあやしきを見たりしたぐひ、枚挙に遑あらず。

(中略)

右金銅塔婆すてに成就せしに、其金猶餘り若干ありしかば、又弘前の治工高屋氏に命じて、御長一寸二分の弥陀の像一万軀を鑄させらる。師兼綜衆芸の徳ありて、頗る工巧明を得られたり。依て其鑄模の像をば師手づから彫刻せられる。遂に享保十五年庚戌正月、一万軀の鑄功成就せり。師夫より道場に引籠り、一七日如法念仏と修して、一万軀の開眼、慶讃を遂られたり。弘前誓願寺は師の受業の地なり。しかるに四十餘年前回祿の災に罹りて、未仮殿の座なれば、此一萬軀の尊像を誓願寺に奉納し、これを有信の人にあたへ、其謝恩の浄財を以て建立の助力となさんと志なり。

同伝によれば、享保12年(1727)貞伝は、古金物など700貫を募り、「青銅塔婆(県重宝)」を建立した。さらに余った地金で、享保15年(1730)長さ一寸二分の阿弥陀像一万体を鑄造し、弘前市誓願寺本堂復興のため、浄財とひきかえに信者に与えたとされる。



貞伝作と伝えられる西光庵本尊
(石造阿弥陀如来座坐像)



青銅塔婆(県重宝;今別町本覚寺)

万体仏の遺存状況

享保15年(1730)誓願寺において配られた万体仏は、津軽地方を中心に、南は新潟県から北は北海道まで広範囲にわたって遺存が確認されている。西北五地方においては、従来小泊地区5体(西山徹・対馬一雄・太田政義・秋元久弥・海満寺蔵、海満寺蔵を除いてすべて町指定文化財)、中里地区1体(葛西末太郎)、五所川原市1体、板柳町1体(慶峰寺)の計8体、このほか今別町2体(本覚寺蔵)、平川市2体(平川市指定文化財)ほか知られている。

県外では、北海道福島町に7体(注3)、隣接する松前町内でも多数残されているという(注4)。さらに石狩場所請負人であった石狩市阿部屋村山家にも1体伝世するほか(注5)、十勝地方広尾町に所在する禅林寺にも1体保存されている(広尾町指定文化財)。悉皆調査が実施されていないため詳細は不明であるが、現時点では、津軽海峡を挟んだ小泊ならびに松前地方に分布の中心が存在するようである。



秋元久弥氏蔵



対馬一雄氏蔵



西山 徹氏蔵



太田正義氏蔵



海満寺蔵



葛西末太郎氏蔵

中泊町の貞伝作鑄銅阿弥陀如来立像

万体仏にまつわる信仰

万体仏は、一般にお守り用の携帯仏として使用されたほか、副葬か単独埋納かは不明であるが、海満寺・五所川原市資料のように土中から発見された資料も認められる（注6）。また北海道福島町では、幸運をもたらす仏像として（注7）、松前町では海上安全・豊漁の仏様として信仰されているという（注8）。石狩市阿部屋村山家伝世品も、海難よけのお守りとして船乗りや漁業者の信仰を集めていたとされる（注9）。万体仏信仰の一端に、漁民や船乗りたちが介在することは明らかであり、津軽海峡を挟んだ地域に万体仏が多く分布する理由も、それらの信仰の一環と理解される。

なお寛政元年（1789）クナシリアイヌの蜂起によって、和人71名が殺害された「クナシリ・メナシの戦い」に関連して、同事件の顛末を伝える「国後蝦夷騒動記（注10）」では、万体仏と引き換えに助命される和人が描かれており興味深い。

まとめ

貞伝作万体仏は、近世中期に制作された鋳銅製の大量生産品であるが、来歴が明かであるとともに、当時の漁民・船乗り達の信仰の在り方が伺われる貴重な民俗文化財と考えられる。

注

- 1 肴倉彌八編 1967『今別町史』
- 2 注1同
- 3 福島町史編集室編 1995『福島町史 第二巻 通説編（上）』
- 4 松前町史編集室 1994『概説 松前の歴史』
- 5 北海道開拓記念館 1993『北海道開拓記念館総合案内』
- 6 青森県立郷土館 1996『特別展図録 西・北津軽の仏たち』

7 注3同

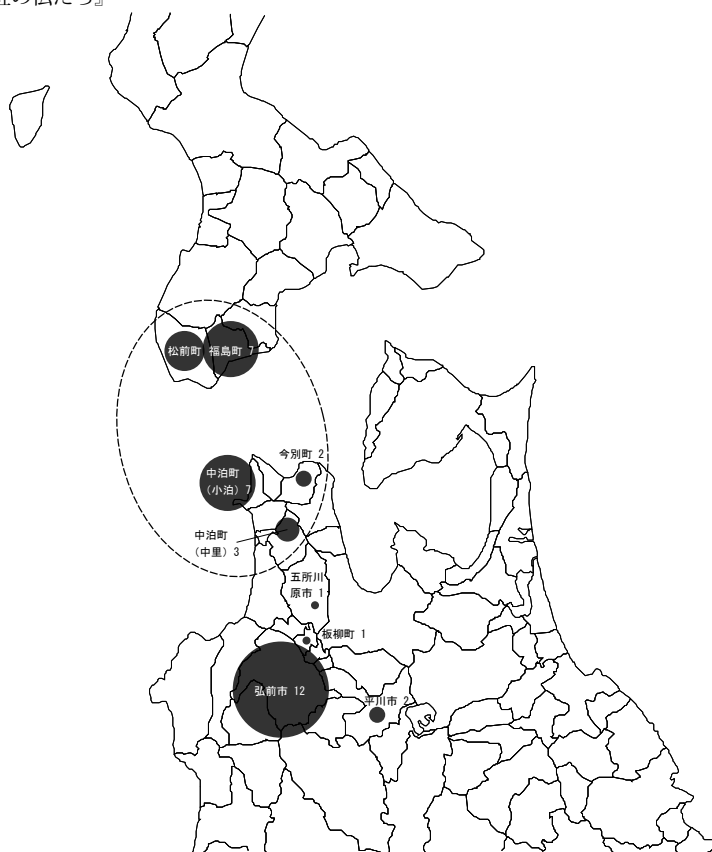
8 注4同

9 注5同

10 知床倶楽部ホームページ

<http://www.shiretokoclub.jp/index.html> より。

ただし原典は本城玉藻編 1933『根室千島
両国郷土使』)



貞伝作阿弥陀如来貞伝金仏遺存分布

「西願寺青玉」について

寸法 青玉 01 径 9.0 cm / 青玉 02 径 9.0 cm

材質 ガラス製

員数 青玉 01 46 個（青玉のみの数） / 青玉 02 38 個（青玉のみの数）

所有者 中泊町小泊字小泊 68 西山 徹

由来等 小泊地区旧家よりもたらされた青玉を、先代住職が数珠に改装したものである



青玉 01



青玉 02

「青玉」とは

「青玉」とは、アイヌ民族が好んで着用したガラス製のいわゆる「アイヌ玉」であり、「虫巣玉」「山丹玉」とも称された。

アイヌの人びとの装身具の中でも、ガラス玉だけで作った首飾りを「タマサイ (tama-say)」、金属製の装飾板を伴ったものを「シトキ (sitoki)」と呼ぶが(注1)、青玉はいずれにも用いられる。

今回申請の青玉 2 連は、小泊地区旧家より浄土真宗西願寺にもたらされたものであり、本来は後述する鱈ヶ沢町来生寺蔵の 1 連（径 15.0 cm、青玉 53 個前後）と同一個体であったとされるが、原状の復元は困難であり、本来の形態も不明といわざるをえない。



アイヌ玉を装着するアイヌ女性

『蝦夷島奇観（北海道開拓記念館蔵）』

（ただし青森県立郷土館 2004 『蝦夷錦と北（ただし青森県立郷土館 2004 『蝦夷錦と北方交易』より転載）



タマサイ（左）・シトキ（右）

（市立函館博物館蔵）

青森県内所在の青玉

青森県内所在の青玉については、遺跡出土資料ならびに今回申請資料を除くと、鱈ヶ沢町来生寺と深浦町円覚寺において確認されている(注2)。うち鱈ヶ沢町来生寺蔵の資料は、西願寺よりもたらされたものであることから(注3)、県内には少なくとも西願寺蔵ならびに円覚寺蔵の2種類の青玉群が存在したことになる。

なお両寺ともに、「蝦夷錦」が確認されている点が興味深い。元来蝦夷錦は清朝が周辺民族に下賜した絹織物の官服・反物であり、北方交易(山丹交易(注4))によって当時の蝦夷地や本州にもたらされたものと考えられている(注5)。中村和之は、それらの交易ルートについて、北京からアムール川を下って、間宮海峡を渡ってサハリン、そして蝦夷地を経て、本州に至る5,000 kmに達する長大なものを想定し、アイヌ民族により重要視された青玉もこれらのルートによってもたらされた可能性を説いている(注6)。

山丹交易品としての可能性

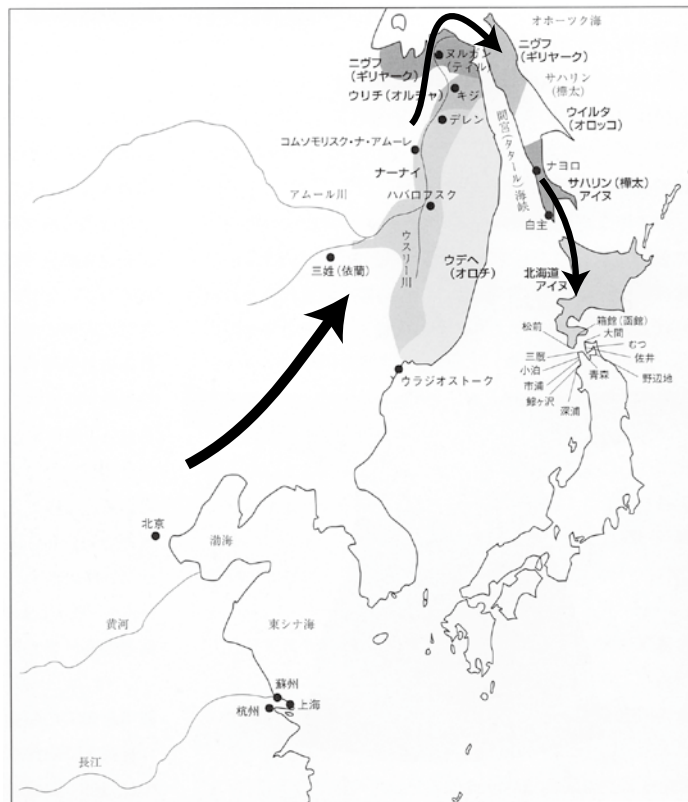
本申請資料は、同一個体であった鱈ヶ沢町来生寺蔵資料も含めて考えれば、本来は1m前後の長さ(103.6 ≒ 3.14 (9+9+15))であったことが伺われる。これらの資料はすべて青玉で構成されているわけではないが、青玉総数約137個で除すれば、1個あたりの径は概算値で7.5mm以下となる。

アイヌ墓から出土したタマサイ・ガラス玉を中心に考古学的な検討を行った関根達人は、玉の長径を基準に、大玉(2cm以上)・中玉(1cm以上2cm未満)・小玉(1cm未満)に分類したうえで次のような変遷過程をまとめた(抜粋)(注7)。

- ① 17世紀以前のタマサイに使われているガラス玉の9割は、長径1cm未満の小玉で占められ、長径が2cmを越すような大型のガラス玉は存在しない。
- ② 16・17世紀のタマサイは、青玉の比率が高い。
- ③ 18世紀のタマサイは、ガラス玉がやや大きくなり中平玉が増えるとともに、青玉の色は、色が濃



青玉(左;鱈ヶ沢町来生寺蔵)／青玉(右;深浦町円覚寺蔵)(ただし青森県立郷土館2004『蝦夷錦と北方交易』より転載)



青玉の来た道(青森県立郷土館2004『蝦夷錦と北方交易』に加筆)

く透明性の高い青から、透明性に欠け空色がかった青へと変化する。

また佐々木利和は、極東の民族事例より、直径1 cm以上の青玉については江戸や大阪でつくられた日本製のもの、1 cm以下のものは大陸からもたらされた可能性が高いとしている（注8）。本申請資料が、長径1 cm未満の小玉のみで構成されること、青玉の比率が高いということからすれば、18世紀以前に製作された大陸産のものであり、山丹交易等によってもたらされた可能性も視野に入ってくる。いずれにせよ本申請資料が山丹交易によってもたらされたものであるという確証を高めるためには、鉛の同位体比等に基づいた産地分析が必要であろう。

参考資料「蝦夷錦打敷」

蝦夷錦と青玉の招来ルートの近似性については前述したが、西願寺蔵の蝦夷錦について参考資料として紹介したい。

「蝦夷錦打敷」

山丹交易を介し、アイヌ民族の手を経て松前藩に渡り、各地へ運ばれたと考えられる絹織物、牡丹文の赤地錦内敷。天明2年(1782)に越後屋権■、駒屋孫右衛門両人が寄進したものである。

※裏書墨書は「天明貳壬寅（みずえのとら）11月西願寺重物 志主 越後屋権■、駒屋孫右衛門」「大小ノ内■■■智教代四十二才ニテ死」とある。年代がわかるものとしては青森県内最古の資料である。



まとめ

今回申請資料である青玉は、山丹交易によってもたらされた大陸産である可能性、ならびに原型は当時アイヌ民族によって珍重された「タマサイ (tama-say)」もしくは「シトキ (sitoki)」であった可能性が考えられる。また近世の小泊地区が、漁場経営や交易を通じて、蝦夷地と関わりが深かったという歴史特性を物語る資料として重要である。

注

- 1 日本民具学会編 1999『日本民具事典』
- 2 青森県立郷土館 2004『蝦夷錦と北方交易』
- 3 西山徹氏のご教示による。
- 4 「山丹交易」とは、山丹人（ウィルタ・ニブフ等の黒龍江下流域に住む北方民族）と樺太アイヌとの交易。のち、和人の厳重な管轄下におかれるようになった。（参考：『日本史用語辞典』、『日本史大辞典』）
- 5 注2同
- 6 中村和之 2004「蝦夷錦・青玉と北方交易」『蝦夷錦と北方交易』青森県立郷土館
- 7 関根達人 2007「タマサイ・ガラス玉に関する型式学的検討」『アイヌ文化の成立と変容-交易と交流を中心として-』法政大学国際日本学研究所
- 8 佐々木利和 2001『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館歴史文化ライブラリー 128